

本日の学び:「ペヌエルでの格闘」 テキスト:創世記32章23-33節

【理解の手がかりとして】

ヤコブは伯父ラバンと完全に決別して、カナンへの帰還の旅を始めた。その旅の初めに、「神の御使いたちが現れ」(32:2)る。この神の御使いたちはヤコブに何も語らないが、これはヤコブの旅路を神が見守っていることの証であろう。そしてヤコブはその場所を「マハナヰム(二組の陣営)」(32:3)と名付けた。その意味するところが定かではないが、主の使いが陣営を組んで、主を畏れる人を守るといったイメージか。⇒詩編34:8。なお、その地理的な位置詳細も不明。

32章は4節に進むと兄エサウが登場してくる。かつてヤコブは兄への父イサクからの祝福を偽って奪った(27章)。そこでヤコブは母方の伯父ラバンのもとへ逃げた(28章)。これは20年前のことであった。そうしていざ生まれ故郷カナンの地が近くなると、20年前にエサウが怒ったことが鮮明に思い出され、エサウをなだめるための努力を始めた。

ヤコブはセイルの地、エドムの野にいるエサウのもとに使いの者を送り、下手に徹したご機嫌伺いを立てる(32:6)。しかしこの使いの者がヤコブのもとに帰ってきてもたらしたのは、兄エサウが400人の男たちを連れ、ヤコブに会いに来るという報告であったので、ヤコブは「非常に恐れ」(32:8)た。

そしてヤコブは、一行を二組に分け(これが先の「二組の陣営」の名付けの根拠との説もある)、エサウがやってきて、一組を破壊したとしても、もう一組は難を逃れさせようとした。賢明な策である。

その上で、ヤコブは主に祈った。その内容には、①自分は慈しみとまことを受けるに価しない者との罪責認識(32:11)、②主への信仰告白(32:13)すなわち寄りすがり、である。⇒詩編51:19

それからヤコブは、エサウへの贈り物を準備する。膨大な贈り物(家畜すなわちヤコブがラバンのもとで得た財産)で、それほどの誠意を示せば、エサウが赦してくれるであろうと、ヤコブは考えたのであろう。

そうして本課の箇所に入る。「ヤボクの渡し」と呼ばれる有名なエピソードである。この話の舞台であるヤボク川は、死海から北へ40kmほどヨルダン川を遡ったあたりの水量豊かな支流である。ヤコブとその一行はこのヤボク川まで来、家族と持ち物すべてにこの川を渡らせて宿営させた。しかし自分だけは独り残っていた。なぜヤコブがそうしたのか理由は書いていない。翌日のエサウとの再会に備えて、独りで神に祈るためであったのかもしれない。

続く25-33節の話は謎に満ちている。色々な疑問が湧いてくる。Q1「夜明けまでヤコブと格闘した者とは何者か」Q2「なぜ彼は夜が明けてしまう前に話してくれと言ったのか」Q3「なぜヤコブは彼に祝福されるまで放さないと言ったのか」Q4「なぜその者はヤコブの名をイスラエルに変えたのか」Q5「なぜその者は名を提示しなかったのか」等々。

これらの疑問に対する一応の解釈として、以下のように考えられる。

A1)ヤコブと格闘した者は、「お前は神と人と闘って勝った」(32:29)とあるから、神ご自身、あるいは神の御使いと考えられる。

A2)その者が、夜が明けることを避けたのは、神の顔が見られることを避けるためであった、と考えられる。

A3)エサウの赦しを得る前に、神の祝福を得、エサウと対峙する心構えを得たかった。⇒33:10

A4)「ヤコブ」という名は「かかと」「(足を)引っ張る」の意義があり、それはヤコブの生き方そのものであった。その名、その生き方を自覚させ(32:28)、神の前であらためて罪と向き合わせられる経験をした、とも受け取れる。そして「イスラエル」(神が支配される(闘われる))という名を受ける。「神と人と闘って勝った」の「勝った」をどう理解するか…逆説であるが、神と取っ組み合い、神の祝福なしに生きれない自分として徹底的にしがみついたことが(自らの改心と降伏)、信仰的勝利と考えられているのかもしれない。

A5)主の名を知ることは、主と直接相まみえることと同意。そしてその瞬間は死をも意味した。⇒出33:20

ヤコブは、その者が神であることを感じていたので、「その場所をペヌエル(神の顔)と名付けた」(32:31)。そこで彼は腿を痛めてしまっていた。「かの人(神)がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところをうったから」(32:33)であった。

『聖書教育』より

「神と格闘するほどの切実さで祈る、…この格闘でヤコブは…ここから新たな歩みを始めることになります。」(聖書の学び～ペヌエルでの格闘)。

「自分の力を過信していたヤコブでしたが、神と顔を合わせたのに、なお生きている者とされました。自分の力に過信した生き方が砕かれ、弱さを抱えた者を持ち運び、護ってくださる神の、その慈しみに身を委ねながら歩むことにヤコブは気づかされました。それがイスラエルという新たな名前だったのです。腿の関節をはずされ足を引きずってでも、なお故郷に向かうヤコブの姿に、イスラエルの真の姿を見ることができるとは思いません。」(聖書の学び～ヤコブからイスラエルへ)